

## 秋山和慶さんの思い出

東京 山口 光 恒



自宅で演奏中の山口さん

日本を代表する指揮者の一人である秋山和慶さんが本年元日に自宅で転倒して頸髄を損傷して入院、本年1月26日肺炎のため逝去された（享年84歳）。突然のことで、俄には信じられない思いだった。

秋山さんは小澤征爾に次ぐ齋藤秀雄の2番目の弟子で、東京交響樂團を中心に活躍された他、カナダのバンクーバー交響樂團音楽監督を長年務め、ニューヨークフィル・スイスロマンドなど名だたるオーケストラを指揮して世界にその名を知られた方だった。

この有名な秋山さんと東京海上には実は関係がある。私は1962年に入社をしたが、その当時東京海上には器楽部というグループがあり、私も入社直後にそのメンバーとなった。当時器楽部は弦楽器こそ揃っていたが、管楽器はフルート・クラリネット・トランペット・ホルンなどほんの少数で、うろ覚えだがファゴットなどは無かったと思う。当時の主

たるメンバーはバイオリンの加藤さん、ビオラの並木さん、チェロの入沢さん等で数年後に加わるビオラの越村さん、チェロの岩間さんなどはまだ学生だった。メンバー不足に加えて定期的に指導してくれる指揮者も無いという状態でまずは指揮者を探そうということになった。偶々同期入社の中島（忠昭）さんが連れてきたのが当時桐朋学園大学3年生の秋山さんだった。

この秋山さんが定期的に丸の内の本社（帝劇移転前の本社）で指導して下さることになると部員の合奏力が目に見えて向上してきた。何よりも指揮が判りやすい。今でも覚えているが十数人の部員なのにモーツァルトの晩年の傑作「交響曲第40番」に取り組んだ。しかし楽器が不足しているので、例えばファゴットの出番は音が無い。するとここは秋山さん自ら歌って穴埋めをするような状況であった。

当時練習の後は数名の団員と共に秋山さんを囲んで改装前の旧東京駅の地下にあったピアホールで音楽を巡る色々な話をしたことをよく覚えている。

そうこうしているうちに秋山さんが東京交響樂團で指揮者としてデビューし、みるみる忙しくなり、秋山さん指揮で東京海上器楽部が演奏するのは夢物語に終わってしまったのは残念なことであった。その後仕事の繁忙度が増すと共に器楽部自体も1970年代初めの本社建て替えと共に姿を消してしまった。その後1990年代に再度社内オーケストラ結成の動きがあり、そこで出来たのが今年30周年記念演奏会を開いた東京海上フィルハーモニーで

ある。

しかし個人的に秋山さんとのご縁は思わぬ形で続いた。バンクーバー駐在員時代の1980年にバンクーバー交響楽団の演奏会に行ったところ、なんと秋山さんが指揮者として登場した。驚いて終演後に楽屋に秋山さんを訪ね、旧交を温めると共に、どうして秋山さんがここにいるのかと問うたところ、秋山さんから逆に何で山口さんがここにいるのかと問われ、お互いに偶然の出会いに大笑いしたことがあった。後で判ったのだが秋山さんは同楽団の常任指揮者で、しかも同地在住と言うことで市民から絶大な声援と信頼を受けていた。

これが縁で秋山さんの紹介で同楽団コンサートマスターの長井明さんを紹介していただき、長男と次女がバイオリンのレッスンを受けることになったのも懐かしい思い出である。

私が最後に秋山さんの指揮を見たのは一昨年11月にミュージア川崎で、慶應大学の学生オーケストラの第240回定期演奏会を指揮した演奏会でのことだった。

秋山さんは転倒前日の昨年大晦日のミュージア川崎でのジルベスターコンサートを指揮されたばかりで、今後の更なる活躍が期待されていただけに、未だに同氏の逝去が現実味を持って受け入れられない。しかし今となっではご冥福を祈るのみである。

2025年2月6日記

